

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 2 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380961

研究課題名(和文) ライフとキャリアの変容・維持過程の記述 臨床と教育に生きる質的研究法TEM

研究課題名(英文) The description of transformation and maintenance of life and career: the qualitative method of Trajectory Equifinality Method to make use of clinical practice and education

研究代表者

安田 裕子 (YASUDA, Yuko)

立命館大学・文学部・准教授

研究者番号：20437180

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：人のライフ(生命・生活・人生)を時間経過と文化的・社会的文脈下で捉える質的研究法、複線径路等至性モデル(TEM)を、形態維持の視点、関係性・集団というシステムの単位、キャリア教育・支援への還元留意し、研究への実践的適用と、システム論、対話的自己論、文化心理学の観点からの理論的精緻化により展開をはかった。看護学、社会学、言語学、経営学、キャリアデザイン等に及ぶTEMの可能性を追究した。

研究成果の概要(英文)：Trajectory Equifinality Model(TEM) is the qualitative research method by which we can grasp human life with time course and cultural and social contexts. The purpose of this research project was to refine TEM focusing on three points, which were (1) the viewpoint of morphostasis, (2) the unit of system of relationship and/or group, (3) the application for the education and support about career and the return of profits to fields. This project was formed by the practical application of TEM for researches to grasp various experiences and the theoretical examination of TEM from the perspective of Systems Theory, Dialogical Self Theory and Cultural Psychology. Colligating the practical application and the theoretical examination, we developed TEM to approach human life and career. We investigated the applicable possibility of TEM spanning the science of nursing, sociology, linguistics, business study and career design and so on beyond psychology.

研究分野：臨床心理学、生涯発達心理学、質的心理学

キーワード：ライフとキャリア 質的研究法 文化心理学 システム 不定 対話的自己 分岐点 国際情報交換

### 1. 研究開始当初の背景

生殖補助医療が高度化する現代的な社会背景のもと、子どもを望み不妊治療をするも受胎しなかった女性の経験と選択のナラティブ(語り)を、生涯発達を観点から捉える質的研究を行うなかで、人のライフ(生命・生活・人生)を時間経過と歴史的・文化的・社会的文脈のなかで捉える質的研究法、複線径路・等至性モデル(Trajectory Equifinality Model: TEM)を共同で開発してきた。その方法論としての精緻化を行うなかで、諸事象へのTEM適用のニーズが高まり、2012年8月には著書『TEMでわかる人生の径路 質的研究の新展開』(安田・サトウ, 2012)を刊行した。また、国外では、たとえば、2012年3月にブラジル・バイアで第2回文化心理学シンポジウム(バイア州立大学アナ・セシリア=バストス教授主催)が開催され、TEMを用いた研究発表がなされた。

TEMの特徴は、人間を開放システムと捉えるシステム論(ベルタランフィ, 1973/1968)に依拠する点、外在的に計測できる時間ではなく、個人に経験された時間の流れを重視する点、の2点にある。TEMは、非可逆的時間とともにある人の発達や人生径路の複雑性と多様性を、分岐する点(分岐点 Bifurcation Point: BFP)や収束する点(等至点 Equifinality Point: EFP)を同定しつつ捉える分析・思考の枠組みであり、その最小単位は図1のように描かれる。

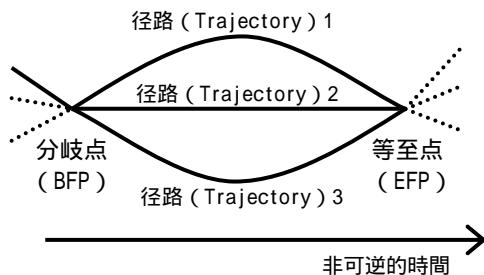


図1 TEM図の最小単位

経験のプロセスや選択の分岐点の把握にTEMが用いられるなかで、次の4つの理論的成果が産出された。それらは、1. 分岐点での変容を捉える視点、2. 不定(uncertainty)を捉える視点、3. ナラティブ・プラクティス/臨床的支援との接合、4. 多声的な自己と場の変容、である。

### 2. 研究の目的

上記の4つの成果を踏まえ、次の3つの点に着目し、実践と理論をむすぶ質的研究法TEMの展開可能性の検討を推し進めることを目的とした。

(1)(形態)維持という視点(上記1・2より): システムは、内外に生じる絶え間ない変化にもかかわらず、安定状態を維持する傾向が備わっている。変化が生じるとすぐに変化を抑える方向に作用するネガティブ・フィ

ードバックが働き、システムが一定に保たれる。しかし、ある地点に達すると変化を増幅するポジティブ・フィードバックが起き、異なる次元の質的変容が生じる。前者の、システムの同一性を維持する傾向を形態維持、後者の、システムが大きく変化し次の段階への発達・移行を引き起こす傾向を形態発生と呼ぶ(中釜, 2008 p.12)。次の段階に移行しがたい揺らぎを伴う不定な状況は、形態維持のひとつのかたちであるともいえ、その様相を捉えていくことは重要である。

(2)関係性・集団というシステムの単位(上記4より): ヴァルシナー(2012 p.193)は、人が文化に属するのではなく文化が人に属するのだと述べた。こう考えるなら、人は、複数の場(文化)を行き来しながら他者と関係を築いたり集団に参加して、自己を組織化していく存在であり、その関係性や集団の形成過程を捉えることが重要であるといえる。その際、複数の場との位置取り(Positioning)をしながら対話的に自己を構成していくという見方を提供する、対話的自己論は有用である。

(3)キャリア教育・支援への適用と実践現場への還元(上記3より): 人のライフに接近するうえで、発達・臨床と教育は地続きである。TEMによる研究において、これまで焦点化される傾向にあった発達・臨床分野を対象とした研究適用を土台にしつつ、実践コミュニティへの参画のなかで形成されるキャリアの把握と、キャリアに関する教育や支援のありようの検討に還元する基盤をつくるべく、方法論TEMの精緻化を進める。

### 3. 研究の方法

(1)実践的適用: 研究代表者(安田)が行ってきた研究へのTEMの適用により検討を進めていく部分と、協働での学びを設定して進めていく部分とに分けて実施する。後者に関し、初年度と次年度の前期には、多分野にまたがり多様な現象を扱う研究会を開催し、後期には、(臨床×教育)といった学融、および(対話的自己×システム論)といった理論に焦点をあてた研究会を企画・開催する。

(2)理論的精緻化: システム論、対話的自己論、文化心理学に焦点をあてた理論的検討を行う。とりわけ、対話的自己論については、グループで従事している“Dialogical Self Theory”(Hermans & Hermans-Konopka, 2010)の翻訳を進める。

(3)理論と実践をむすぶ方法論としての集積: 研究への実践的な適用を基盤に理論的検討を融合させ、人のライフとキャリアに接近し、理論と実践をむすぶ、対人援助に資する質的研究法TEMの精緻化を推し進める。

### 4. 研究成果

臨床心理学、発達心理学、教育心理学、文化心理学、看護学、社会学、言語学、経営学、キャリアデザインなど、多分野にまたがる研

究への適用を検討する研究会の開催（2013年度には、6月には京都と東京で、11月には東京で、2月には京都で、計4回実施。2014年度には、5月に東京、6月に京都、7月・9月に福岡、1月に東京、2月に京都で、計6回実施。2015年度には、6月・8月・12月に東京、9月に京都で、計4回実施）、および、学会での発表ならびに講習会の実施などを通じて、質的研究法 TEM の、実践的適用および理論的精緻化を推し進めた。そして、著書『ワードマップ TEA 理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ』ならびに『ワードマップ TEA 理論編 複線径路等至性アプローチを活用する』を、総勢 40 名を超える多分野の研究者ならびに実践家に執筆いただくかたちで刊行した（2015年3月）。また、『TEA でひろがる社会実装 ライフの充実』というタイトルの著書の出版を企画した（現在、執筆・編集中）。加えて、協働的な研究会活動をもとに、質的データアナリストの育成を目標に掲げた、ある企業との共創的な共同研究を、長期的な展望により開始した。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

#### 〔雑誌論文〕（計7件）

松本克美、金成恩、安田裕子、法と心理学会第16回大会 ワークショップ児童期の性的虐待被害とその回復をめぐる法心理 2 ドイツ・韓国調査の報告、法と心理、査読有、2016（印刷中）

安田裕子、コミュニティ心理学における TEM / TEA 研究の可能性、コミュニティ心理学研究、査読無、第19巻1号、2015、62 - 76

安田裕子、主題と変奏 臨床便り（12）TEA とコンポジションワーク（特集 シリーズ・今これからの心理職 これだけは知っておきたい 医療・保健領域で働く心理職のスタンダード）臨床心理学、査読無、第15巻第1号、2015、140

安田裕子、林久美子、佐伯昌彦、山崎優子 他、法と心理学会第14回大会 ワークショップ 犯罪被害者を取りまく問題 臨床心理学、法社会学、法心理学からの検討、法と心理、査読有、14号(1)、2014、56-62

安田裕子、質的データをどう扱うか 質的研究の手ほどき、臨床心理学増刊（臨床心理職のための「研究論文の教室」研究論文の読み方・書き方ガイド）査読無、第6号、2014、94-100

山崎優子、サトウタツヤ、稲葉光行、斎

藤進也、徳永留美、安田裕子 他、ひらめき ときめきサイエンス「模擬法廷に来て裁判に参加してみましよう」の実践および論考、立命館人間科学研究、査読無、30、2014、87-96

安田裕子、女性の身体と生殖 進展する生殖補助医療とその選択のなかで、女性ライフサイクル研究、査読無、第23号、2013、79-86

#### 〔学会発表〕（計34件）

安田裕子、森岡正芳、サトウタツヤ、黒羽カテリーナ、山田嘉徳、小澤義雄、滑田明暢、対話的自己理論の展開と応用 共生社会に生きる私とあなたへの接近、日本質的心理学会第12回大会、宮城教育大学（宮城県仙台市）2015

豊田香、番田清美、岡部大祐、安田裕子、質的研究方法を基礎とした思考技術プログラム開発の試み「時間的展望（過去・現在・未来）能力に着目したキャリア発達支援ツール」、日本質的心理学会第12回大会、宮城教育大学（宮城県仙台市）2015

安田裕子、松嶋秀明、久保樹里、齋藤絢子、大倉得史、森直久、更生の道を時間と社会に拓くということ 加害性と被害性に留意して、日本心理学会第79回大会、名古屋国際会議場（愛知県名古屋市）2015

Banda, K. , Takahashi, N. , Sato, T. , & Yasuda, Y., Career Identity Work: Visualization of the process of students' career development in school-to-work transition, IAEVG International Conference, つくば国際会議場（茨城県つくば市）2015

廣瀬真理子、安田裕子、複線径路等至性（TEM）アプローチとテキストマイニングによる混合研究法 / 協働により何が捉えられるか？、国際混合研究法学会 アジア地域会議 / 第1回日本混合研究法学会、立命館大学（大阪府茨木市）2015

Sato, T. , Mattos, de E. , Salgado, J. , Kido, A. , Tian, Y. , & Yasuda, Y., Potentials of trajectory equifinality approach in Developmental Psychology, 17th European Conference on Developmental Psychology, University of Minho (Braga, Portugal) , 2015

豊田香、安田裕子、勝谷紀子、森本真由美、曾山いづみ、成人のアイデンティテ

イの変容と発達を示す社会的支援の介入のタイミングの検討 質的研究法 TEA を分析の枠組みとして、日本発達心理学会第 26 回大会、東京大学(東京都文京区)、2015

中坪史典、香曾我部琢、境愛一郎、安田裕子、刑部育子、保育者同士の対話を促すツールとしての複線径路・等至性アプローチ (TEA) 保育カンファレンスの新たなデザイン、日本発達心理学会第 26 回大会、東京大学 (東京都文京区)、2015

安田裕子、チュートリアル・セミナー「新しい発達研究のための基礎講座」複線径路・等至性アプローチ (TEA) 過程と発生をとらえる、日本発達心理学会第 26 回大会、東京大学 (東京都文京区)、2015

安田裕子、サトウタツヤ、伊東美智子、和田美香、北出慶子、分岐点での関わり・援助を考える ボーダーを超えて、TEA で捉えられる、人のライフの変容と維持、対人援助学会第 6 回年次大会、立命館大学 (京都府北区)、2014 他

〔図書〕(計 12 件)

川島大輔、近藤恵、安田裕子 他、新曜社、はじめての死生心理学 現代社会において、死とともに生きる (周産期・乳児期における死)、2016 (印刷中)

稲葉光行、サトウタツヤ、安田裕子 他、新曜社、ワードマップ法心理・司法臨床 (支援者支援 DV 被害に遭った母子を支える支援者への支援)、2016 (印刷中)

Sato, T., Mori, N., Valsiner, J., & Yasuda, Y. et al., Information Age Publishing, MAKING OF THE FUTURE: The Trajectory Equifinality Approach in Culture Psychology (How can the diversity of human lives be expressed using TEM?: Depicting the experiences and choices of infertile women unable to conceive after infertility treatment), 2016 (in press)

宇都宮博、神谷哲司、安田裕子 他、福村出版、夫と妻の生涯発達心理学 関係性の危機と成熟 (不妊治療と夫婦関係)、2016、310 (103-116)

安田裕子、滑田明暢、福田茉莉、サトウタツヤ (編)、新曜社、ワードマップ TEA 理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ、2015、179 (30-51)

安田裕子、滑田明暢、福田茉莉、サトウタツヤ (編)、新曜社、ワードマップ TEA

理論編 複線径路等至性アプローチを活用する、2015、247 (27-59)

Sato, T., Yasuda, Y., Kanzaki, M., & Valsiner, J. et al., Information Age Publishing, Culture Psychology and its Future: Complementarity in a new key (From Describing to Reconstructing Life Trajectories: How the TEA (Trajectory Equifinality Approach) explicates context-dependent human phenomena), 2014, 212 (93-104)

日比野由利、淵上恭子、松尾瑞穂、安田裕子 他、日本評論社、グローバル化時代における生殖技術と家族形成 (不妊治療の終結をめぐる当事者の語り 生殖補助医療の進展のなかで可視化される、子をもつ願望とその相克)、2013、279 (55-78)

Yasuda, Y., & Sato, T. et al., Information Age Publishing, Lives and relationships: Culture in transitions between social roles (Touching realities: Meaning-making on the center stage (Part IV. Contextual realities: Moving beyond the school Commentary)), 2013, 389 (273-283)

やまだようこ、麻生武、サトウタツヤ、秋田喜代美、能智正博、矢守克也、安田裕子 他、新曜社、質的心理學ハンドブック (質的アプローチの教育と学習)、2013、583 (466-486)

村本邦子、土田宣明、徳田完二、春日井敏之、望月昭、安田裕子 他、晃洋書房、対人援助学を拓く (当事者の生に寄り添うということ 対人援助活動のさらなる連携と融合に向けて)、2013、359 (42-54)

安田裕子 他、丸善出版、発達心理学事典 (うしなう 不妊・中絶)、2013、712 (488-489)

〔その他〕

ホームページ等

<https://sites.google.com/site/kokorotem/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安田 裕子 (YASUDA, Yuko)  
立命館大学・文学部・准教授  
研究者番号: 20437180

(2) 研究分担者

佐藤 達哉 (SATO, Tatsuya)  
立命館大学・文学部・教授  
研究者番号: 90215806